
エピソード記述をもとにした園内研修の試み

保育者を対象とした研修の質的調査

齋藤 めぐみ

The Influence on Kindergarten Teachers Training Used by Episodic Recording Method

Megumi SAITO

キーワード：エピソード記述、保育者の資質向上、保育者養成、園内研修

序 論

幼稚園教育要領には、幼稚園教育において幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を重視しなければならないと示されている。そのためには、教師が指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすることが求められる（文部科学省、2017）。

子どもを理解する方法の一つに“エピソード記述”があり、保育の世界において、エピソード記述への関心が高まっている（鯨岡ら2009）。エピソード記述を提唱する鯨岡（2013）は、保育者がエピソード記述を行うことについて以下のように説明している。子どもと保育者の“接面”で生じていることを詳細に描き出して保育者が子どもの思いを受け止めているかどうか、それに基づいた対応をしているかどうかを深く吟味し、そこから保育を振り返る契機にするという意義をもつ。加えて保育の中でのエピソード記述の目的を以下の4点で説明している。①保育の担い手である保育者が子どもたち一人一人とのあいだで経験した様々な事項を保育者自身がエピソードに描き出すこと、②その描き出されたエピソードを他の保育者に読んでもらうことを通して自分の保育を振り返る手がかりにすること、③保育者同志の経験を交叉させて保育の中身を吟味し園全体の保育の質を高めようと努めること、④そのことによって子ども一人一人を丁寧に保育するという理念の実現に繋げていくことである（鯨岡、2009）。

これらのことから、エピソード記述は、ただ記録として記述するだけで終わらせるのではなく、子どもたちを理解するために、エピソード記述をもとにして保育者間で保育について振り返ることが望まれ、保育現場でエピソード記述を用いた園内研修をする意味は大きいと考えられる。青木（2016）は、保育者の描いたエピソード記述から、内容を細かく分析して保育者が乳幼児理解の重要性を認識し、乳幼児理解の向上に関するエピソード記述の効用が改めて示唆されたと報告している。また、及川（2017）は、研修参加者がエピソードを書き、全員でエピソードについて話し合う形式で行った研修が、保育の実践に応用できるものとしてとらえられていることがわかったことを報告している。

本研究は、エピソード記述を用いた研修においてエピソード記述の中心である“接面”の描き方を検討し、エピソード記述を用いた研修の今後のあり方を考察することを目的とする。

方 法

1. 研究内容

2020年度の2回の研修を通して保育者が書いたエピソード記述の内容、研修からの学びについての質問紙の自由記述から研修のあり方を質的に検討する。

(1) 研修期間

エピソード記述を基にした研修は2019年度から始めたが、本研究の対象とする研修は2020年度の8月、12月に行われたものとした。

(2) 研修対象者

千葉県にある保育者養成を行う短期大学の附属幼稚園の教諭9名。

(3) 研修内容

各教諭が各自のテーマを決めてテーマに沿ったエピソードを記述し、エピソード自体の振り返りとエピソードに表されている保育の振り返りという2点を中心にグループワークを取り入れて研修を行った。

1) 各教諭のテーマ

A：ごっこ遊び 満3歳児の保育者と友だちとの関わり方

B：子どものごっこ遊びと生活との関連性 3歳児のごっこ遊びと生活・経験とのつながり

C：外国籍の園児の言葉の獲得と子どもたちとのやりとり 3歳児の外国籍の子どもの自己表現とそれに伴う人間関係の変化

D：クラスの子どもたち同志のかかわり 特別な支援が必要な子が他の子どもとの関わり合いの中で相互に成長していく姿

E：4歳児における遊びの広がり イメージを共有しながら遊びが友だちに広がっていくきっかけについて

F：自然との接触の中での子どもたちの育ち 自然とのかかわりを通した子どもたちの人間関係

G：教諭の言葉がけによる子どもの行動の変化 子どもたち同士の遊びの中での保育者の援助（声掛け）

2) 第1回目の研修内容

自分のエピソードを振り返る

①エピソード記述についての確認（図1）

②このエピソードを取り上げた理由を明確にしてタイトルをつける。

③②について表されているエピソードの箇所を抽出し、これらから考察する。

④保育者と子どもの関りが表されている箇所を抽出し、別の関わり方を考察する。

3) 第2回目の研修内容

他者（グループメンバー3～4名分）のエピソードから学ぶ。

①エピソードのタイトルから、筆者のこのエピソード抽出の意図を考える。

②自分ならどのようなタイトルにするか考える（筆者と同じタイトルでも可）

③このエピソードから、子どもの気持ち、保育者の意図について考察する。

④グループ内で学んだことを共有する。

⑤グループ発表：グループ内で学んだことを全体に共有する。

⑥全体的に学んだことをまとめる。

図1 研修で配布したエピソード記述についての説明

1. エピソード記述とは？
1つの場面を詳しく書き、子どもの気持ちを推測したり保育を考察するための記録
2. 書き方
構成：タイトル（ねらい）、背景、エピソード、気づきと学び（考察）
 - タイトル（ねらい）：
 - ・何を伝えたい、学びたいのか？ がわかる
 - ・そのタイトルで考察が書ける
 - ・同じ場面でも学びたいことによりタイトルは異なる
 - 背景：
 - ・子どもの特徴、人間関係
 - ・出来事の状態、経緯等
 - エピソード：
 - ・行動だけでなく、表情、会話、立ち振る舞い、しぐさを書く
 - ・いつ、どこで、だれが、どのように？ という詳細な事実を書く
 - ・その文章で光景を思い描けるか？ 気持ちを想像することができるか？ を読み返して確かめてみる
 - 気づき・学び（考察）：
 - ・タイトルとセット
 - ・タイトルに沿って、気づいたこと、学んだことを考察する

2. 分析および調査方法

1) エピソード記述の中の接面について

青木（2016）を参考として、エピソード記述中、保育者と子どもとの接面が描かれている文節、子どもたちの行動が描かれている文節、保育者の教育的援助が描かれている文節を抽出し、全体に対する接面の割合を求めた。

2) 研修に対する効果について

2回目の研修終了後に今年度2回の研修で学んだこと、感想、研修内容についての要望を自由に記述する自由記述式の質問紙調査を行い質的に分析した。

3. 倫理的配慮

研究にあたり、エピソード記述に描かれた園児について公開することを保護者の了解を取っていないことから、対象となるエピソード記述の内容は公開せず、研修会そのものの効果検証にすることを対象責任者に口頭で説明した。研究の趣旨に同意が得られたため研修で用いた資料を用いて研修効果についての分析のみの研究とした。

結 果

1. 対象者

エピソード記述を行った保育者は、保育歴10年以上の者が7名、1年目の者が2名であった。研修には参与として副園長、主幹2名も参加した。参加者の中で男性は1名であった。

2. エピソード中の接面について

2回の研修で用いたエピソード記述中、保育者と子どもとの接面が描かれている文節、子どもたちの行動が描かれている文節、保育者の教育的援助が描かれている文節に区分し、エピソード記述全体からの割合を算出した。また、接面からの考察が含まれているかどうかを分析し、まとめて表1に示した。

1つのエピソードを抜かして、全てのエピソードに保育者と子どもたちとの接面が描かれていた。保育者Dの2回目のエピソードは、常に客観的な視点での子どもたちの行動が描かれていた。接面は描かれているもののそれについての考察がされていないエピソードも見られた。接面場面は、ほとんどが会話での接面であった。

表1 エピソード中の接面の割合

保育者	研修回	接面 (%)	行動 (%)	教育的 (%)	接面についての考察
A	1回目	67	33	0	○
	2回目	38	62	0	△
B	1回目	11	78	11	×
	2回目	40	60	0	○
C	1回目	25	75	0	×
	2回目	38	50	13	×
D	1回目	23	77	0	×
	2回目	0	100	0	△
E	1回目	7	93	0	○
	2回目	43	57	0	○
F	1回目	45	45	9	○
	2回目	61	39	0	○

3. 研修からの学び

研修からの学びについて、第2回目の研修終了後に各回の研修で学んだこと、総合的に学んだことに分け自由記述形式の質問紙により調査を行った。その結果を表2から表4に示した。

1) 第1回目の研修からの学び

第1回目は、エピソード記述の書き方を確認し、テーマと考察について学んだこともあり、書き方についての学び、テーマを決めたことからの学びについての記述が多くみられた。また、エピソード記述を書くことによる保育への影響についてもみられた。主な内容を共通するカテゴリーに分け、表2に示した。

2) 第2回目の研修からの学び

第2回目は、他者のエピソードを読んで考察し合うというグループワークを取り入れた。そのため、他者にエピソードを伝える、他者とエピソードを共有して考察し合うことからの学びの記述が多くみられた（表3）。

3) 全体的な振り返り

2回の研修を通しての学びについて、また今後の研修のあり方について表4に示した。

表2 第1回目の研修からの学び

エピソードの書き方について
<ul style="list-style-type: none"> 基本的なエピソード記録の書き方について、他クラスなどの記録などを参考にしながら学べた。 エピソード記述の書き方についての詳細を学んだ。背景では、遊びの中に登場する子どもについての特徴やかかわりなどを書くこと、エピソードにおいては、何を伝えたいのかが伝わるように書くこと、またタイトルは焦点を絞り、考察につなげていくことなど実践において学ぶことができた。 読んでいる人が分かる背景にすること、それに基づき考察をすること、文章が長くないようにすることを学んだ。 同じエピソードでも、さまざまな切り口から書くことがあることを学んだ。 テーマと考察をし直すことにより、自分が何を伝えたかったのかがより明確になったと感じた テーマを決めたことが1番の学びであった もっと細かい部分的な場面をとらえて書くことにも大きな意味があると学ぶことができた。
テーマを設定することについて
<ul style="list-style-type: none"> テーマを具体的にしていく事で、今後の保育の視点や気をつけていくべきところを学ぶ事ができた。 テーマを具体的にすることで、子どもを見る視点が定まり、今まで理解していたようでそうでないこと、気づかなかった声や友だち関係・関係性、その子自身の特性（良い点、課題点など含め）など発見したり、もっと知りたいという意識が強くなったように感じた。 同じ場面でも、テーマによっては違うとらえ方ができることは、子どもをより深く知るためには大切なことであると感じた。
保育への影響について
<ul style="list-style-type: none"> 保育を行う上で、改めて保育者の援助の仕方や子ども同士のかかわりをねらいを考えながら見ていくことができるようになったと思う 考察し直すことで、子どもの見方や「子ども＝遊び」に対する捉え方が少しずつでも変わってきたのではないかと思う。 保育を文章化することで、思考で振り返るだけでは気づかないことが見えてくると感じた。 エピソードの記述で“楽しんでいた”“嬉しそうに…”などと表記しがちであるが、果たして本心はどうだったのかを見つめ直すことも大事だと思った。

表3 第2回目の研修からの学び

エピソードの書き方について
<ul style="list-style-type: none"> ・背景やエピソードが分かりにくいと他者のテーマを考えるのが難しく、誰が読んでわかるようにすることを学んだ。 ・エピソードの切り取り方は保育者それぞれだが、それを読んでその場面がイメージできるよう細かく記録を取っていくことで、考察がよりよく実のあるものになると感じた。
他者と共有するグループワークについて
<ul style="list-style-type: none"> ・他者のエピソードを具体的に考察していくことで、新たに子どもの気持ちや保育者が何を意図して援助をしたのかが明確になった。 ・自分にはなかった視点での意見を聞くことによって、新たな気づきにつながり考え方に広がりを持つことができる。 ・自分とは違う見方や考えが面白く、視野が広がった。 ・他者の考えを知れたことで、自分が気づかなかった見方や考え方があることに改めて気づくことができた。 ・自分自身の保育を振り返るには、自分の考えだけでなく他者の意見を聞くということもとても大きな意味のあることにも気づいた。 ・他者の考えを聞くことで、自分の考えとの違いを知ったり、より深く考えたりするきっかけとなったことは大きな学びであった。 ・自分では捉えられなかった視点や考え方も学ぶことができ、考察ではいかに客観的に捉えてまとめることが重要であると学んだ。 ・他者の文章を読むことで、さらに客観的に物事をとらえて、感じたことや考察など意見交換をすることで見えなかった部分を新たに知ることが出来た。 ・相手に自分の考えを伝えていくことで相手側も考え方が広がり、お互いプラスになっているのではないかと感じた。 ・自分の保育について伝える場にもなりとても貴重。自分では持っていない視点だったり、保育の援助の仕方や声掛け子どもの反応など新鮮に感じたり新たな気づきを発見することができた。
保育への影響について
<ul style="list-style-type: none"> ・もっと多くのエピソードを記録して自分なりに考察して考えていけるようにするとより今後の援助などが明確になるのではないかと感じた。 ・どんな援助や、働きかけ・声掛けを行えば遊びが発展していったのかなどアドバイスを頂くことができ、現場で長年働いている方たちの生の声を聴くことができ、手段を知ることが出来た。 ・私自身、発達に合わせた援助をすることが出来ているのだろうかと改めて振り返ることが出来た。 ・自身の保育だったらどう援助をするのか考えるきっかけにもなった。 ・些細な行動や言葉を知ること、保育者が何を目的に保育をしているのか、子どもたちがどう成長して欲しいのか明確になることで、振り返ったり参考にしたりできると感じられた。

表4 全体を通しての学び

エピソード記述の書き方について
<ul style="list-style-type: none"> 文章だけで伝えるのはなかなか難しかった。 1場面を1つの視点から文章で書きあげているため、どこまで細かく伝えたら分かりやすいのか・そして自分ではその場ではこのように考えていたが、文章だけではその意図が伝わりづらいのだと感じた。
書くことからの学びについて
<ul style="list-style-type: none"> 数分の小さな場面を切り取ったエピソードの中でも、子どもの今の姿を見てとることができ、学びや気づきを多く捉えることができたと感じた。 自分が今何に興味を持っているのか、困り感を感じているのかを整理することができた。 改めて文章を読み返してみるともっと全体を広い目で柔軟な考えで保育を進めていくべきだと感じた。 エピソードを文章に起こしてみると1つの場面だけでも様々な考えや動きがあったのだと気づくことが出来ました エピソード記録を書くで見逃してしまいがちな子どもの成長を感じ、認め自信へと繋げることができた。 エピソード記録を作成・共有することで、自分の保育やクラスの子どもの様子・行動などを振り返ることが出来た。
話し合うことからの学びについて
<ul style="list-style-type: none"> 他者のテーマや考察と一緒に考え、意見交換することで自分とは異なる考えの発見や視点の広がり、これで良いんだという安心する部分もあったように思う。
保育への影響について
<ul style="list-style-type: none"> 子どもや遊びを見る視点が定まったことで見えてきたものが多くあり、意識するところが明確になってきたようにも感じた。 他のエピソード記録から各クラスの子どもの様子や先生方の保育の仕方を学ぶことができ、自分の保育にプラスになっている。 自分の保育を見直すことが出来た。 テーマを具体的に決めることで、より明確な視点となりテーマに沿ったねらいでの保育を心掛けることができた。 回を重ねることで、さらに自分たちの保育を見る目が高まっていくことを期待したい。
研修全体について
<ul style="list-style-type: none"> 第三者から見たアドバイスを多くいただき、エピソード記録はもちろんのこと、より保育力が上がるよう、ご指導ご指摘（添削）いただけるような研修を行っていただけたらよいと思う。 赤ペンを入れていただいたところや助言いただいた部分からの学びが大きかった。 エピソード記録と同様の動画などの事例を見ながら、記録を書いても勉強になるかと思った。1つのエピソードでそれぞれの感じ方、とらえ方の違いを見ることでまた違った視点で保育を見つめなおすことが出来るきっかけにもなるかと思う。

4 考 察

本研究の目的は、エピソード記述を用いた研修において、エピソード記述の中心である“接面”の描き方を検討し、エピソード記述を用いた研修の今後のあり方を考察することであった。

まず、“接面”に関して考察する。エピソード記述を提唱した鯨岡（2009）は、保育者と子どもとの接面を描くことこそがエピソード記述に重要であると述べている。本研究の対象としたエピソード記述には1つのエピソードを除いて全てのエピソードに接面が描かれていた。ただし、エピソードの記述中、接面が描かれている部分の割合は、行動を客観的に描いている部分より少ないエピソードが多かった。

これらの要因について、まず、著者が行った研修の中で“接面”を強調したエピソード記述の説明をしなかったことが要因のひとつであると考えられる。鯨岡（2013）はエピソード記述で何よりも書き手である自分が接面の当事者として自分の心の動きを含め関わっている人の心の動きを感じ取って描き出すところにその本領があることを強調している。しかしながら、この本領についての説明を強調した研修を行わなかった。また、これまでの保育の記録は客観的に書くことが指導されてきた（鯨岡、2013）。そのため、保育者の多くは、そこからの脱却ができていないのではないかと考えられる。今回のエピソードの分析結果を研修対象者に示し、今後、接面を描くことの大切さを強調して再度説明することが望まれる。

次に、研修からの学びについて考察する。

1回目の研修で学んだことについては、書き方を学んだということ記述が多かった。その中で、テーマを設定すること、テーマを具体的にすることが考察にも結びつき、エピソードで伝えたいことが明確になった、を始め、テーマが大切であると感じた保育者が多かった。また、具体的なテーマの設定は、エピソード記述を描くことだけでなく、保育の視点にも影響を与えていることがわかった。今後、エピソード記述を用いた研修や指導について、テーマを具体的に設定することを強調するとよいことが明らかになった。

2回目の研修では、他者のエピソードを読み、他者からの視点で考察するグループワークを行った。他者のエピソードを読むことについて、また他者からエピソードについての意見をされることからの学びが大きかったことが伺えた。自分では持っていない視点で保育を振り返ることができ、実際どのような援助をしていったらよいのかを考えさせられるきっかけになると思われる。序論でもふれたが、エピソード記述は保育者同士が読み合っこそ保育を振り返ることができるかとされている。今回の研修参加者は、この読み合いにおいての学びが大きいことを実感できたことは大きな学びである。

鯨岡（2009）は、読み合うといっても、ただ感想だけを述べるのではなく「子どもの思いを受け止める」「子どもの気持ちに寄り添う」「子どもの心を育てる」「子どもを主体として受け止め主体として育てる」といったエピソード記述研修の中核的なテーマを常に参照して議論を行う必要があると述べている。今回の研修においては、この視点での議論がほとんどなされなかったことは注意が必要である。

研修の全体的な気づきとしては、書くことでの発見が多かったということが伺えた。具体的なテーマをもち、エピソードで接面を描き考察すること。これが保育者において、自分の保育を振り返る第一歩であると記述から伺われる。

本研究は、研修に対しての効果検証を行い、研修がどうあるべきかについて検討した。しかし、本来研修は保育者の意識の変容、保育の変容を目指すためである。このことをふまえ、今後は研修により保育者の意識がどの程度変わったか？保育がどのように変わったか？等、研修が保育に与える影響について主観的ではなく客観的に評価する方法を見出し、研修の効果を検討することが望まれる。

最後に、再度、なぜエピソード記述を描くのか？についてエピソード記述を提唱した鯨岡（2009）の

文章から抜粋する。

“なぜ、保育にエピソード記述が必要なのでしょう？エピソード記述を保育のみなさんに推奨してきた私にとっては何よりも従来の保育を見直して、目に見えない子どもの心（気持ちや思い）に保育者がしっかり目を向け、それを受け止め、保育者の思いを返すところをエピソードに描き出すことによって、これまでの「させる保育」の流れを変え「子どもの心を育てる保育」の流れを創り出したいというのが、その最大の理由です。…現行の保育や家庭の養育に共通するのは、いずれも大人の「こうさせたい」という思いや都合が先行して、子どもの思いを十分に受け止めていないことです。自分の思いをしっかり受け止めてもらえない子どもは、自分の存在が認められていないように感じ、何かしら不安に駆られ自分がいまこうして自分らしくあることに自信をもてず、元気をなくしたり、意欲的に外界を探索できなくなったりして、次第に大人の言うがままになるか、逆に周りのことに無関心になって自分勝手になるかの両極に振り分けられてしまいます。こうして結局は自己肯定感の乏しい人格をかたち作ることになってしまうのです。…周囲の大人への信頼感と自分への自己肯定感など心の育ちが十分でない子どもを多数見るにつけ、保育の基本、つまり子どもを育てることの基本は「まずは子どもの思いを受け止め、それから大人の願いを伝えていくこと」あと改めて気づかされます。…「思いを受け止め、思いを返す」という目に見えない子どもと保育者の心の動きをエピソードに描き、描かれたエピソードを周囲の者が読んでその場面を共有するしか、それについて知るすべがないのです。これがいま、エピソード記述が保育の場に必要になる第一の理由なのですが、それがまた、保育の振り返りに直結する動きでもあります。”

保育者が日々の保育の中でエピソード記述を描き、皆で共有していくこと。このことこそが、子どもの思いを受け止め、思いを返し、子どもの心を育てる。多くの保育者が実践できるよう、保育者を対象としたエピソード記述を用いた研修を行うことは大きな意味があるといえる。引き続き研修を行い、よりよい研修のあり方を検討することが望まれる。

〔謝辞〕 本研究をすすめるにあたり、研修に参加してくださり事後調査に協力してくださった幼稚園の先生方に記して感謝申し上げます。

■引用文献

- ・青木一永（2016）岡保育実践現場における乳幼児理解の向上に関する研究—エピソード記述への取り組みを通して—大阪総合保育大学紀要（10）, 159-180
- ・五十嵐紗織（2017）保育実習におけるエピソード記述を通した子ども理解 信州豊南短期大学紀要（34）, 99-117
- ・及川留美、小野崎佳代、西村実穂、福崎淳子、梶原里美（2017）現場と大学との協働による園内研修の試みⅡ—保育者によるエピソード記述の検討を中心とした研修事例の構造— 東京未来大学研究紀要10（0）, 177-185
- ・岡花祈一郎、杉村伸一郎、財満由美子、松本信吾、林よし恵、上松由美子、落合さゆり、山元隆春（2009）「エピソード記述」を用いた保育カンファレンスに関する研究 学部・附属学校共同研究紀要（38）, 131-136
- ・鯨岡峻、鯨岡和子（2009）「エピソード記述で保育を描く」ミネルヴァ書房
- ・鯨岡峻（2015）「なぜエピソード記述なのか」東京大学出版会
- ・文部科学省（2019）「幼児理解に基づいた評価」